

## ～シリーズ～「JICA で働く人たちのヒューマンストーリー」

### ■第5回■ 駒沢二明さん（ブラジリア出張所 現地職員）



“人生を振り返り、剣道、日本語教師、飛行機操縦、そしてJICAという仕事は目指すところが同じだと気づいたときは嬉しかったです。すなわち、「自身を鍛え、成長させてくれること」です。”

**JICA ブラジリア出張所で一貫して協力プロジェクトを担当してから今年で30年目を迎える。特別な節目にこれまでの人生を振り返り、その一環した人生哲学について語った。**

埼玉県朝霞市生まれ。

8歳の頃、家族と共にブラジルのサンパウロ近郊にあるモジ市へ工業移住。

現地の学校に通うことに。周りに座っている子供たちの髪の毛の色が一人一人違っているのに驚いた記憶があるという。

ポルトガル語は自然と覚え、いつしかブラジルの普通の日系人少年として育っていった。

人生の転換期が訪れたのは大学進学。初めて家族のもとを離れ、単身サンパウロ市へ渡った。

「経営学部に進学したが、実は隣の建築学部の図書館に入り浸って、ドイツのバウハウス等色々な建築やアートの図鑑ばかり見ていました。」

それまでと全く異なる環境に置かれた駒沢さん。剣道を始めたのもこの頃から。

「その頃の自分は学術的、文化的素養・教養を求めています。」と振り返る。

1992年大学を卒業、就職した。不況のあおりで民間企業が次々倒産する状況を目の当たりにし悩んだ結果、経営学部出身ながらサンパウロの邦字新聞を就職先を選び、社会部記者となった。

「新聞社では日本語の記事の書き方を学んだことが一生の財産」となったという。

しかし、入社1年後、JICAとの出会いのきっかけとなる一本の電話があった。「JICAは技術協力担当のポストを募集中。受けてみないか。」

人材派遣会社からの電話だった。

駒沢さんはそれまで、JICAについて詳細は何も知らなかったそうである。

「大学で経営学部におり、仕事とはいかに経済的利益を得るかというメンタリティだったのが、JICAでは『支援』、『人助け』を最大の利益にできる組織と知って衝撃を受け、パラダイムシフトとなりました。」と当時を振り返る。

受ければブラジリアへ引っ越す必要があったが、駒沢さんには迷いはなかった。

面接を受け、そして無事入社。1993年、駒沢さん26歳のことだった。

入社後、実に多種多様な案件に携わった。「アマゾンの研究施設建設では、現地踏破。ふだんの協力戦略や理論が、現場の厳しい状況に耐えるものなのか考えさせられました。実践と理論は両輪であり同時に発展させることが重要と思いました。」



アマゾンでの現地視察の様子

また、ミナス・ジェライス州の帰国研修員と業務で連携。「帰国研修員同窓会はJICAとブラジル側機関をつなぐ重要な存在です」と力説する。

2022年1月、ブラジルで発生した洪水への緊急援助物資供与も担当。「外交ルート、現地の体制整備、米国の備蓄施設からの空輸等、午前3時ごろJICA本部から確認の連絡が来たりしました。鉄火場の仕事で、いつ何時一刻を争うデマンドが来るかわからないので、携帯電話を枕の横に置いて寝ました。」と当時の苦労を振り返る。

「JICAに入って一番印象に残るエピソードは」と聞くと「小規模農家を支援するプロジェクト」を担当した際、先方機関との会議で、州の農業局長官や研究公社所長から『世銀の大規模な資金支援も活用しているが、零細農家へのマンツーマンの指導はJICAの方が得意で大いに評価する』と聞き、嬉しかったです。」と目を細める。



先方政府機関との協議の様子

この案件では活動モニタリングのため何度も現場へ出向いた。真夜中にブラジリアを出発。未明3時頃空港に着き、5時間かけて陸路で移動。ようやく現場へ到着するのは朝8~9時で、ブラジリアを出発して約8時間後にやっと小農家への指導のモニタリングが始まる。帰りも当然同じ道程。



周辺はレストランもなく、ランチはコンビーフ缶にビスケットだった。(左画像参照)

それでもプロジェクト立ち上げから終了まで担当し、4年に渡り現場の人たちと真摯に向き合った。

駒沢さんは「現場には、日本の専門家に勝るきめ細かい協力はないと思います。」と断言する。

ある円借款の借款契約調印に向けた国会承認のため、上院議会にのりこみ、決議に向け調整した時、当時のCAE(上院経済審議会)議長が、上記小農プロジェクトの州の出身だったこともあり、JICAなら。。。と快諾を得、無事通過、というエピソードもあった。

青年ボランティアの任地訪問で、日本文化の火を消すな、とがんばっている人たちと交流。日本の理解者を増やしていく事が、日本にもブラジルにも大切という事を実感した。

青年ボランティアの任地訪問で、日本文化の火を消すな、とがんばっている人たちと交流。日本の理解者を増やしていく事が、日本にもブラジルにも大切という事を実感した。

こうして、JICAでは一貫してプロジェクトや協力案件の最前線で活躍してきた。

そして気づけば、今年で入社して 30 年。

特別な節目に「これまでの JICA 人生を振り返り、一番嬉しかったことは何か」と聞いてみた。それは、「JICA が、確かにブラジルと日本の懸け橋になっていると実感できたこと」。

JICA 入社と共にシニアボランティアの勤めによりブラジリアのモデル校で日本語教師を務め、その後、直接 JICA とは関連しないが、古武道（剣術）助教として日本文化の普及に努力した。また、飛行機操縦を学んでライセンスを取得し、週末は自己所有の小型機で飛んでいる（下記画像参照）。



「剣道助教や日本語教師として後進や生徒と交流していて、彼らが学ぼうとしているものと、JICA の仕事で目指しているもののエッセンスは同じと

気づいたときは嬉しかったです。それは、『心身を錬磨し、礼節を尊び、信義を重んじ、誠を尽くして、自己の修養に努め、人類の繁栄に寄与』（日本剣道連盟）、すなわち『自他共に鍛錬し成長する精神』です」。

飛行機はいざ離陸すると、天候が急変したりなど、情け容赦ない環境にほうりだされることになるが、これが、緊急援助などの現場に身を置くにあたっての重要な鍛錬になり、成長の糧となっていると駒沢さんは確信する。

今後は、JICA や仕事外で培った豊富な経験を活かし後進の指導に携わるとともに、事業全体の会議に班代表として参加、活動の統括としての役割を果たす等、より大きな責任を担いたいと意欲的だ。

「己を鍛錬することで、さらなる成長へ」。一貫した人生哲学は、今後も駒沢さんの活躍の場を広げていくに違いない。

（了）



■駒沢二明（こまざわ・かずあき）

埼玉県朝霞市生まれ。おとめ座。

1993 年 7 月 JICA ブラジル事務所採用。技術協力プロジェクト（防災分野等）を担当。趣味は剣道と軽飛行機操縦。（兵法二天一流剣術初目録。過去に全伯古武道大会 1 位一回、3 位一回）。人生のモットーは「堅忍不拔」「不撓不屈」。

※～シリーズ～「JICA で働く人たちのヒューマンストーリー」では、ブラジルで国際協力に携わる JICA スタッフを紹介します。仕事面のみならず、これまでの人生や家族の様子、エピソード等も交えつつ、「人」としての姿にスポットライトを当てることで、ありのままの姿をお伝えします。

† ブラジル国のバイア州及びミナスジェライス州における洪水被害に対して、JICA が供与した緊急援助物資（テント、毛布、プラスチックシート）を供与＜詳細はこちら→[JICA ニュースリリース](#)＞

‡ 「リオグランジドノルテ州小農支援を目指したバイオディーゼル燃料のための油糧作物の導入支援プロジェクト」＜詳細はこちら→[プロジェクト案件概要](#)（ODA 見える化サイト）＞